

令和3年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 兵庫県神戸市中央区下山手通 5-10-1
管理機関名 兵庫県教育委員会
代表者名 西上 三鶴

令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年5月25日(契約締結日)～令和3年3月31日

2 指定校名・類型

学校名 兵庫県立兵庫高等学校
学校長名 升川 清則
類型 グローカル型

3 研究開発名

“次世代が選ぶまち” KOBE の実現
～地域社会の未来を担い世界へはばたく実践者の育成～

4 研究開発概要

本研究では、地域課題の探究と同時に正解のない国際的な課題をも見つけ直し、その共通点を探りつつ課題解決策を生徒自らが模索する。コンソーシアム各機関との協働によりSDGsに関連するテーマについて探究活動を行い、事業終了後も「ESD for 2030」に向けた持続的な教育活動ができるような体制を構築する。グローバルな探究テーマとして①持続可能な地域経済の発展、②先進技術を活用した環境・健康・医療・福祉の充実、③ビッグデータを活用した外国人との共生・交流を設定し、それらに関連する課題を生徒自らが設定して探究活動を行い、成果を地域に還元する。

5 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
蜂谷 和則	財務省近畿財務局神戸財務事務所・所長	関係行政機関の職員(委員長)
水山 光春	京都橘大学国際英語学部・教授	学識経験者(副委員長)
廣岡 徹	兵庫教育大学教職大学院・元教授	学識経験者

グローバル・リーダー育成の 事業実施				○ 中 止								
-----------------------	--	--	--	-------------	--	--	--	--	--	--	--	--

(2) 実績の説明

- ・研究の進捗状況等を把握し、年2回の運営指導委員会において、運営指導委員会と連携しながら、学校に対して適宜指導、助言を行った。
- ・兵庫県教育委員会、大阪大学、WHO 神戸センターが主催して「高校生国際問題を考える日」をオンラインで実施し、兵庫高校の取組を他校と共有し、探究的な学びの普及に努めた。
- ・県内の地域との協働および県の事業であるひょうごスーパーハイスクールの指定を受けている学校を招集し、SDGsをはじめとする世界や地域が抱える課題の解決について、課題研究等の探究的な学びをどのように進めていくか等について議論するひょうご次世代リーダー育成推進懇話会（仮称）を12月に実施する予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響に鑑み、今年度は中止した。
- ・地域との協働事業との相乗効果を狙い、新たな文理融合型教育の展開を目指した兵庫型STEAM教育実践モデル校として指定した。
- ・グローバル・リーダー育成事業として、例年7月に県内の高校生を対象として実施しているひょうごグローバル・リーダー育成キャンプは、新型コロナウイルス感染症拡大の状況に鑑み、今年度は中止した。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
未来創造 シンポジウム	×※1											
総合的な探究の時 間（普通科1年）				1回				×※3	1回	1回	1回	
総合的な探究の時 間（普通科2年）		○※1	4回	2回	3回	3回	3回	3回	1回	2回	3回	
グローバルリサー チ（普通科1年）					1回	2回	← KOBE 研修として実施 →			1回	2回	1回
創造基礎（学科 1年）			8回	5回	4回	6回	2回	2回	2回	3回	2回	1回
RRE（学科1年）			4回	3回	2回	3回	4回	3回	2回	3回	2回	
情報の科学（学 科1年）データ サイエンス分野									○※2	3回	1回	
創造応用Ⅰ（学 科2年）		○※2	8回	8回	4回	10 回	2回	4回	2回	6回	6回	2回
創造応用Ⅱ（学 科3年）論文作成	○※2	○※2	2回									
KOBE研修（1年）							1回	3回	4回	1回	1回	
海外研修代替 （東京研修、2年）									×※4			

※1 緊急事態宣言発出により中止

※2 休校、または長期休業期間中の課題として実施

※3 神戸大学学問分野別特別講義は新型コロナウイルス感染症拡大により中止

※4 海外研修代替（東京研修）は新型コロナウイルス感染症拡大により一部をオンラインにて実施

（２）実績の説明

ア 研究開発や地域課題研究の内容について

（ア）普通科（各学年 280 名対象）

a 総合的な探究の時間

1年 320名（創造科学科を含む）を対象に国内外で活躍する外部講師によるキャリアデザインや学問分野研究、探究学習の手法やSDGsテーマに関する講演会を実施

2年 文理に関わらずグループ編成を行い、SDGsテーマに沿った新聞活用授業、探究学習の手法に関する講演会・講義、SDGsを念頭に神戸市、及び兵庫県の地域課題についてPBL型学習を実施し、成果発表

b 普通科学校設定科目「グローバルリサーチ」（1年）

31名を対象にSDGsテーマに沿った新聞活用授業、新聞メディアについて外部講師による講義を実施

（イ）創造科学科（各学年 40 名対象）

a 学校設定科目「創造基礎」（1年）

おもに地域課題、金融・財政、メディアリテラシーについて外部講師による講義を実施し、神戸市、及び長田区においてフィールドワークを行い地域の課題解決に向けた提言や実践活動を実施

b 学校設定科目「RRE」（1年）

「創造基礎」「課題研究」で学習した地域課題研究と自然科学研究について、外国人留学生に英語で発表し意見交換を実施

c 情報の科学（1年）

観光をテーマにデータ活用の実習に取り組み、ポスター発表を実施

d 学校設定科目「創造応用Ⅰ」（2年）

文理に関わらずグループ編成を行い、新型コロナウイルス感染症にともなう地域課題について学習し、発表を実施。また、SDGsテーマに沿った社会科学と自然科学のアカデミックな研究に取り組み、成果発表

e 学校設定科目「創造応用Ⅱ」

「創造応用Ⅰ」の研究成果について論文作成

イ 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科、科目等）

（ア）普通科

1年次「総合的な探究の時間」「グローバルリサーチ」はロングホームルームや課外活動等、2年次「総合的な探究の時間」は週1時間で実施。3年次の活動を充実させるため次年度より「総合的な探究の時間」でPBL型学習を推進する。

（イ）創造科学科

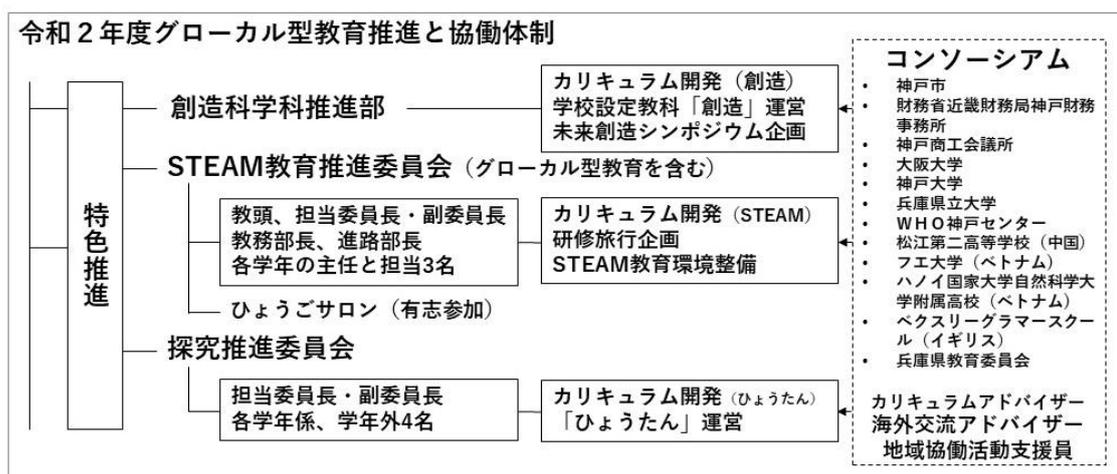
1年次「創造基礎」は週2時間（9月下旬より週1時間）と課外活動で実施。1年次「課題研究」は9月下旬より週1時間で実施。1年次「RRE」は週1時間で実施。1年次「情報の科学」は週1時間で実施。2年次「創造応用Ⅰ」（探究学習）は週2時間と課外活動で実施。3年次「創造応用Ⅱ」は、文系は週2時間、理系は週1時間で実施。

(3) 研究開発の実施体制について

ア 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

教頭と創造科学科推進部において研究内容の企画立案し、STEAM教育推進委員会（グローバル型教育を含む）・探究推進委員会で内容共有、協力要請をおこない、校務運営委員会、職員会議において全体での共有を経てプログラムの実施を行った。別途、「ひょうごサロン」において、有志教員による実践研究を実施した。

イ 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）



※「ひょうごサロン」はSTEAM教育やPBL型学習の研修するための教員有志による実践研究ラウンドテーブルであり、延べ116名の教員が参加

ウ カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて

カリキュラム開発等専門家は、STEAM教育推進委員会およびひょうごサロンの運営に対する指導助言を行い、「総合的な探究の時間」等の探究的な学びの発表会にて生徒の活動を視察のうえ、教員への指導助言を行った。海外交流アドバイザーは、本年度は計画変更により海外研修の実施中止を決定したため、運営指導委員会における指導助言を行うにとどまった。地域協働学習実施支援員は体調を理由に辞退されたため、支援実績はなかったが、同じく地域協働学習実施支援員である神戸市つなぐラボが代替となり、生徒の神戸市内における調査等に関して都度対応し、関係機関との調整を行った。

エ 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

次の内容について定期的に学校長へ報告し、協議を行った。アンケート調査、カリキュラム開発、担当教員、コンソーシアムとの連携、外部講師の選定等。

オ カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

多岐にわたりコンソーシアムの協力を得てプログラムを実施することができた。特に、神戸に集積している医療・情報・ロボット分野の研修を「KOBE研修」と題して実施した。神戸市役所職員および神戸医療産業都市機構職員の調整により、医療分野は神戸アイセンター病院等、情報分野は理化学研究所計算科学研究センター等、ロボット分野は㈱ダイヘンから協力を得て講義、施設見学、体験学習等を実施することができた。

カ 運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

第1回運営指導委員会（令和2年10月22日）において、コンソーシアムの連携強化と海

外研修の代替について協議した際、神戸市の最先端科学技術に着目するよう助言を得て、これをきっかけに「KOBE 研修」を企画し、神戸市に支援を得て実施することができた。

(4) 類型毎の趣旨に応じた取組について

ア KOBE 研修

地元神戸で日本の最先端の科学技術に触れることにより探究学習のテーマ設定の参考にして主体的に学ぶ態度を育成することと、地元神戸の各種研究機関、企業等を訪問し様々な体験を通して生徒の学習意欲を高めるとともに、自己の進路についても考える機会とするために研修を実施した。普通科グローバルリサーチ受講生（1年）と創造科学科（1年）のうち55名を対象に実施した。医療・情報・ロボットの各分野の内容及び連携先は次の通りである。

- (イ) 医療分野：（公財）神戸医療産業都市推進機構担当者より概要説明、国際くらしの医療館神戸見学、神戸アイセンター説明、ビジョンケア 高橋政代社長より講義
- (ロ) 情報分野：（公財）神戸医療産業都市推進機構担当者より概要説明、理化学研究所 佐藤三久副センター長より講義、（公財）計算科学振興財団（FOCUS）にて講義および施設見学
- (ハ) ロボット分野：(株)ダイヘンよりロボット技術に関する講義、ロボット工場見学、技術者との交流、ロボットスクール講師による体験学習

イ 海外研修代替（東京研修）

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、申請時に企画していた海外研修の実施が困難となり、東京における研修に変更した。STEAM 教育の充実を目的に東京を研修先に設定したものの、全国の感染状況が悪化し企業等の研修受け入れが極めて困難になったため、実地での研修は断念した。次年度は、ベトナムのコンソーシアムと協力し、オンラインによる講義やバーチャルフィールドワーク、交流プログラム等を実施する。

(5) 成果の普及方法・実績について

ア 地域課題研究の発表会等による成果発表・普及

対象生徒	内 容	実施日
普通科2年生全員	「総合的な探究の時間」ひょうたん発表会	2/8・2/22
普通科2年生 GR 生	「総合的な探究の時間」グローバルリサーチ受講生発表会	10/12・11/16 ・2/8・2/22
普通科1年生 GR 生 創造科学科1年生	「KOBE 研修発表会」KOBE 研修参加者成果発表（オンラインで配信）	2/1
創造科学科1年生全員	「創造基礎 B」発表会 “次世代が選ぶまち”KOBE の実現に向けて、高校生の力を発揮しよう！	7/28 9/15
創造科学科1年生全員	「情報の科学」発表会 “観光データサイエンス”	2/2
創造科学科2年生全員	「創造応用 I」発表会 “ポストコロナ(COVID-19)社会を創造しよう”	7/27
創造科学科2年生文系	「創造応用 I（文系）」中間発表会	9/30・11/18
創造科学科2年生全員	「創造応用 I」文理研究発表会（オンラインで配信）	2/10
創造科学科1年生1名	「SDGs Ideathon 2020」 <主催：関西学院大関西学、特定非営利活動法人国際社会貢献センター（ABIC）>成果発表1位	8/11
創造科学科2年生3名	「高校生ボランティア・アワード 2020 WEB 大会」 <主催：公益財団法人風に立つライオン基金>	12/12

創造科学科2年生3名	「探Q！RESAS 成果発表会」 ＜主催：内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局＞	12/15
創造科学科1年生10名	「リサーチフェスタ」発表会 ＜主催：甲南大学＞	12/20
創造科学科2年生4名	「Japan Challenge Gate 2021～全国ビジネスプランコンテスト～」 ＜中小企業庁主催＞（書類選考落選）	
創造科学科1年生4名 創造科学科2年生1名	「Glocal High School Meetings 2021」 ＜主催：文部科学省指定グローバル型地域協働推進校探究成果発表委員会＞ 英語部門 金賞（探究成果発表委員会特別賞）受賞（1年生） 日本語部門 銀賞受賞 ※生徒間投票 第3位（2年生）	1/30
普通科2年生 GR 生 創造科学科1年生文系 創造科学科2年生文系 計22名	「第8回高校生国際問題を考える日」 ＜主催：兵庫県教育委員会・大阪大学・WHO 神戸センター＞ 代表発表及び生徒間投票第1位（2年生）	2/11
普通科2年生 GR 生3名 創造科学科2年生19名	「IBL ユースカンファレンス」 ＜主催：IBL ユースカンファレンス実行委員会＞	3/20～3/27

イ その他の活動

対象生徒	内 容	実施日
創造科学科1年生9名	「実践研究福井ラウンドテーブル2020 Virtual Summer Sessions」 ＜主催：福井大学連合教職大学院＞ ワークショップ参加	6/20
普通科2年生 GR 1名	「第17回多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー」 ＜主催：兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、JICA 関西、神戸YMCA、PHD 協会、難民事業本部＞ ワークショップ参加	8/4
創造科学科1年生4名	「尼崎ラウンドテーブル」ワークショップ参加 ＜主催：関西国際大学高大連携センター＞	11/21
普通科1年生 GR 生21名 普通科2年生 GR 生3名 創造科学科1年生9名 創造科学科2年生3名	「ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2020」 ＜主催：ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 運営委員会・特定非営利活動法人関西 NGO 協議会＞ 実行委員として企画・運営を行い、その他生徒は探究活動報告会やレポーター等として参加	12/20
創造科学科1年生1名 創造科学科2年生1名	「第14回全日本高校生模擬国連大会」 ＜主催：グローバルクラスルーム＞ 予選を通過して参加	11/14 11/15
創造科学科2年生4名 (参加部活動73名)	「第10.1回長田区・高校生鉄人化まつり」 ＜主催：KOBE 鉄人 PROJECT＞ 実行委員として企画・運営を行う	11/22
創造科学科1年生6名 (参加部活動54名)	「第11回長田区・高校生鉄人化まつり」 ＜主催：KOBE 鉄人 PROJECT＞ 実行委員として企画・運営を行う	3/21

1.1 目標の進捗状況、成果、評価（令和元年：実績 令和2年：目標 → 実績）

【1-a】地域課題解決に向けて単なる提案だけでなく自らが積極的に行動し、地域貢献活動を行った生徒の数 **令和元年：80 令和2年：160 → 172**

今年度は、アンケートの結果全校生960人中172名であった。主に「創造基礎」の実践活動や「長田区高校生鉄人化祭り」がそれにあたるが、新型コロナウイルスの影響でイベントの中

止や縮小化された関係で探究学習の成果としての実践活動は多いとは言えなかった。しかし、アンケート記述より、創造科学科1年次に実践した地域活動の延長で、2、3年生になっても地域課題に自ら取り組んでいる生徒もおり、授業の成果も見られている。

【1-b】社会人として地域に残り、地域を支えるリーダーとして活躍したいと考える生徒の割合

令和元年：28 令和2年：30 → 30

1月中旬に実施したアンケートの結果、全校生の29.9%が将来地域を支えるリーダーとして活躍したいと考えている。その理由として、地域貢献活動を主体的に行った生徒数は上述の通り決して多くはなかったが、地域の方々とともに活動することでその達成感が大きく、地域を支える魅力を実感した生徒が多かったと考えられる。また、「KOBE研修」に参加した生徒（1年54名）のうち、「KOBE研修を通して、地元神戸を知るきっかけになり、自分の進路の参考にすることができたか？」という質問に対し「よくできた」44%、「できた」が54%で、この企画により将来地元を視野に活躍する人材育成に寄与したことがうかがえる。

【1-c】英語運用能力について、卒業までにCEFRのB1～B2レベルを取得する生徒の割合

令和元年：77 令和2年：80 → 93

SGHの指定、及び大学入試への英語外部検定導入の流れの中で、本校でも英語教育の強化を図り、実用英語技能検定（英検）に積極的に受験させたり、学年全員でGTECを受験したりした。しかし、昨年の大学入試への英語外部検定導入の中止を受け、本年度は英検の受験者数が激減し、学年でのGTEC実施も取りやめとなった。そのため、外部試験によりCEFR B1以上と判定された生徒の英語運用能力と本校作成「英語CAN-DOリスト」を照合し、その規準によって外部試験未受験生徒の英語実用能力を測定したところ、対象生徒（本年度卒業生310人）のうち93%がB1レベルに達していると判定した。

【2-a】生徒の成果発表会と教員の成果報告会を実施した回数

令和元年：5 令和2年：6 → 24

今年度は、休業期間の影響により予定の変更を余儀なくされたものの、普通科および創造科学科で生徒発表会を校内で計14回実施することができた。また、校外の発表会に計8回参加し、延べ67名の生徒が外部からの意見を参考に研究を深めた。本年度は、定期的に校内発表会を実施して、探究的な学びのサイクルを展開することができた。その成果が“Glocal High School Meetings 2021”における英語発表部門「金賞」受賞に結び付いたと考える。

教員の成果報告会については、令和2年6月20日にNPO法人日本教育再興連盟（ROJE）主催オンラインイベントにて、現場教員や学生22名を対象に、「シティズンシップ教育と地域課題研究」というテーマで地域協働学習をシティズンシップ教育の文脈でとらえた実践報告を行った。また、令和2年7月4日に奈良女子大学・福井大学連合教職大学院合同カンファレンスにて、「Zoomを使った新入生オリエンテーションの試み」というテーマで教職大学院生や現場教員約30名を対象にオンラインで実施したPBL型学習の導入部について実践報告した。

【2-b】グローバルな課題又は地域課題に関する公益性の高い国内外の大会に参加した生徒の割合

令和元年：9.8 令和2年：20 → 14

令和2年度は中止あるいは延期される大会が多く、オンラインも含めて大会参加者が当初の目標の20%に届かず、14%となった。しかしながら、8月にオンラインで実施された「SDGs Ideathon」等の新規開催の大会やこれまで本校が未参加の大会に応募する生徒が増えるなど、昨年度実績を超える割合の生徒が参加した。また、SGHの指定時から参加している全日本高校生模擬国連大会に出場することができ、ローカルだけでなく、グローバルな視野にたった活動を推進することができた。

【2-c】 学校が主催するシンポジウム又は発表会、報告会に参加する他校の教員および生徒数

令和元年：586 令和2年：600 → 25

4月に予定していた「未来創造シンポジウム」をはじめ、外部から参加者を募る予定であった発表会等がすべて中止となった。しかしながら、「KOBE 研修ふりかえり発表会」や「創造応用最終発表会」にオンライン視聴を募ったところ、他校教員等から合計25名の参加があった。次年度は、外部からの参加者を募ることが可能な状況になれば積極的に参加を呼び掛ける予定であるが、オンライン等の工夫を検討し、実施の方向性を図りたい。

なお、令和2年11月14日に学校説明会、および創造科学科説明会において、延べ804名の中学生を対象に「総合的な探究の時間」「グローバルリサーチ」「創造基礎」「創造応用Ⅰ」の取り組みを発表した。

【3-a】 学校の教育活動に参画した地域人材の延べ人数

令和元年：98 令和2年：100 → 195

「情報の科学」「総合的な探究の時間」、及び学校設定科目の8科目で謝金を支払った延べ131名の外部人材に学校の教育活動への参画を得た。これに加え、謝金辞退者も多数いることから、概数として50名をカウントした。おもにコンソーシアムを活用した外部人材の授業等での講義、指導助言であるが、それ以外にもフィールドワーク等の受け入れの協力を得ることができた。さらに、「KOBE 研修」で14名の協力を得た。本年度実績が目標の倍になったのは、コンソーシアムの積極的活用に加え、オンラインでの講義や指導助言等での協力を得る機会が多くなり、その手軽さから外部人材も以前よりも柔軟に対応していただき頻度が増した経緯がある。

【3-b】 生徒を受け入れ、地域課題解決のための活動を協働で行う団体等の数

令和元年：11 令和2年：12 → 27

感染防止のためにフィールドワークを含めた学校外での活動が制限されたものの、オンラインによる活動も含めて協働で活動した団体は目標12の倍以上となる27であった。神戸市やその外郭団体、大学、企業の協力を多く得ることができたのは、コンソーシアムをもとにした連携によるところが大きい。今年度から普通科による探究活動が本格実施となり、新たに協働に加わる団体も増え、多様な活動に繋がることが期待できる。

1 2 次年度以降の課題及び改善点

(1) SGH の研究成果をふまえたコンソーシアム活用によるグローバル型探究活動

SGH の取り組みの中で連携した団体をもとにコンソーシアムを構築し、本年度は積極的に活用することができた。新型コロナの影響から海外研修が中止となり、生徒の課題意識もローカルなもの扱う内容が多かった。もう一度SGHの成果を踏まえ、グローバルな視野をもった課題研究を進めていく必要がある。外部講師による講義や外国人との交流の機会を増やす等して対策を講じたい。

(2) カリキュラム・マネジメント体制の構築

PBL型学習を導入した学習を「総合的な探究の時間」等の探究学習だけにとどまらず、普通教科においても扱うカリキュラム・マネジメント体制の構築が必要である。今年度実践研究ラウンドテーブル「ひょうごサロン」を創設したが、有志教員の実施では参加者や教科の偏りが生まれ、教科科目への落とし込みを図ることができなかった。教職員対象学校評価において、「STEAM教育推進委員会およびひょうごサロンを実施し、教職員の共通理解を図るとともにカ

リキュラム開発を行う」質問で、「よくできた」が12.8%、「できた」が51.3%、「あまりで
きなかった」が23.1%、「できなかった」が2.6%、「回答材料なし」が10.3%であった。本
校の教職員アンケートの達成率（「よくできた」「できた」の合計）が例年は概ね75%程度で
あることから、本研究に対する教職員の取り組みはやや低いものとなった。教員間で本校の
STEAM教育の理解をより一層深めていくために、カリキュラム・マネジメント体制を分掌上に
位置付け、校務として継続的に議論する体制を構築したい。

（3）STEAM教育に沿ったカリキュラム開発と環境整備の充実、及び機器の活用

「KOBEの強みをいかしたアーバンイノベーション」をグローバル型教育の柱に据え、最新の
科学技術やICT機器の利活用を視野にSTEAM教育の環境整備や機器の購入を進めた。それら
を活用した萌芽的な取り組みも生まれたものの、継続性や学習成果に結びつくようなものにはな
っていない。そのため、次年度ではICT機器の操作研修や実践事例を増やし、教科の枠を超え
たカリキュラム開発を推進したい。そのため、12（2）で述べた通り、「ひょうごサロン」の
あり方を再検討し、STEAM教育推進のためにも一層の拡充を図りたい。

（4）ユネスコスクールとしてESDの推進

平成29年に本校はユネスコスクール加盟校に承認され、その事業の一環としてSDGsにそ
つた課題研究に取り組んでいる。しかしながら、多くの生徒はユネスコスクールの認知が低く、
どのような文脈で探究活動を実施しているのかを自覚できていない。そこで、ホームページや
外部講師による講義等を通じてユネスコスクールの認知度を高め、生徒がユネスコスクールを
意識した探究活動を実施できるよう働きかけていく。

（5）パフォーマンス評価の開発

本研究はグローバル、ローカル、SDGs、STEAM教育と多岐にわたるテーマや教育実践を対象に
しており、評価について項目の検討や指標、判断材料について整理する必要がある。また、ど
のような方法で生徒から評価資料を収集するのか、その分析方法をどうするのか、その評価を
どのように次年度以降活用するのかという流れについても検討したい。

（6）英語運用能力の向上とそれを測る外部検定の検討

11【1-c】で述べた通り、本年度は外部検定による英語運用能力を測る機会を失ってしまった。
来年度は計画的に、かつ継続して計測できるよう英語外部検定の導入を含め検討したい。また、
次年度も海外研修が実地での実施は難しいと予想されるため、10（4）イで述べたようなオン
ラインで実施可能なプログラムを検討したい。

【担当者】

担当課	兵庫県教育委員会事務局高校教育課	T E L	078-362-9447
氏 名	松岡 克晋	F A X	078-362-4288
職 名	主任指導主事	e-mail	koukoukyouikuka@pref.hyogo.lg.jp